

「英語が使える日本人」のグローバルキャリア構築 — 「英語学習」から「日本語教育」へのライフヒストリー —

平畑 奈美

滋賀大学国際センター 〒522-8522 滋賀県彦根市馬場 1-1-1

E-mail: hina_tkbn@yahoo.co.jp

あらまし 2002 年、文部科学省は『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想を策定、以来「英語が使って」「グローバルな場で活躍できる」日本人の育成が、教育機関に強く求められるようになっていく。しかし、そうした日本人とは具体的にはどのような人物なのか、実際の教育現場で、どのような教育目標を設定し、学習者をどう動機づければいいのか、といった点は曖昧なままである。本稿では、この課題を考えるための参考例として、大学在学中に高い英語力を身につけた後、日本語教師に転向して青年海外協力隊に参加、そこを足がかりにグローバルキャリアを構築していった日本人 4 人のライフヒストリーを提示する。彼らに共通するのは、「人に必要とされたい」、「自分の好きなことがしたい」という動因を持っていたこと、そして日本語教師隊員を経たことで、日本への貢献を意識するようになったということである。ここから、英語の運用能力向上のみに着目するのではなく、英語を使って国際社会の中で何ができるのか、また個人の幸福感や自己肯定感につながるようなグローバルキャリアとはどのようなものなのか、若者たちに示していく必要があると主張する。

キーワード グローバル人材育成、グローバルキャリア、英語が使える日本人、ライフヒストリー、青年海外協力隊日本語教師隊員

Global Careers of Japanese with English Proficiency: Life histories of English learners turned into Japanese teachers

Nami HIRAHATA

Shiga University International 1-1-1 Banba, Hikone-shi, Shiga, 522-8522 JAPAN

E-mail: hina_tkbn@yahoo.co.jp

Abstract “Cultivation of Japanese with English Proficiency” and “Global Human Resource Development” has have been the two major issues of Japanese Ministry of Education, Culture, and Sports and Technology (MEXT) in this century but what these terms mean is are vague and ill-defined. In this paper, we will focus on several life histories and life stories of Japanese, who first got equipped with high English proficiency while in college, then participated in the Japan Overseas Cooperation Volunteers as Japanese language teachers and later established global vocational careers. What we find in those stories and histories in common is are strong aspiration “to be needed” and “to do what they want” and revelations toward “contribution to Japan” through experiences as Japanese language teachers. This suggests that in order to achieve “Global Human Resource Development” we should not narrowly focus on improvements on language knowledge and four skills and proficiency but rather show young Japanese how they can achieve happiness and self-fulfillment in global careers by working in an international society using English.

Keywords: Global Human Resource Development, global careers, cultivation of Japanese with English proficiency, life

平畑奈美, “「英語が使える日本人」のグローバルキャリア構築: 「英語学習」から「日本語教育」へのライフヒストリー,”
言語学習と教育言語学 2016 年度版, pp. 47-64,

日本英語教育学会・日本教育言語学会合同編集委員会編, 早稲田大学情報教育研究所発行, 2017 年 3 月 31 日.

Copyright © 2016-2017 by Nami Hirahata.

All Rights Reserved.

1. 主旨

近年、「(仕事で)英語が使える日本人」や、「グローバル人材」ないし「グローバルな場で活躍できる日本人」等の育成が、国の教育の喫緊の課題とされ、この方針に沿うことが教育機関に強く求められている。

しかし、「(仕事で)英語が使える」とは、具体的にどのような状態になることを指すのか、「グローバルな場で活躍」するということは、具体的にどのようなキャリアを指しているのか明確ではない。教育する側としては、とりあえず基本的な英語の運用力を高め、海外で働く経験を若者に推奨するという対応しか考えられないだろう。しかし疑問は残る。動機づけはどうするのだろうか。また、グローバルな場での活躍する若者たちに求めるのは、英語力向上のみでいいのだろうか。そもそも、これは何のために行うのか。日本の、または日本の若者たちの幸福につながるものなのか。こうした疑問についての明確な回答は、少なくとも国の指針の中には見出すことはできない。

無論、これらの疑問は教育の本質ともかかわるものであり、一つの研究知見をもって安直な回答を出すことのできないものである。そうした限界の存在を認めたと上で、本稿では、上記の疑問を考える上で参考となる事例を提出したい。具体的には、「英語が使える」ようになり、「グローバルな場で活躍する」ことを願い、日本語教育に転向して青年海外協力隊に参加、そこを出発点として、それぞれのグローバルキャリアを築いた4人の日本人のライフストーリーである。その上で、特に国内の大学での教育にかかわる人々に対し、1. 日本の若者をグローバルな場へと導くためには、英語能力もさりながら、日本語教育の能力をつけさせるということも有効である、2. 日本の若者が英語ができるようになり海外で就職するようになったとしても、それだけであれば日本社会が得るものは多くはない。より重要なのは、彼らの中に、グローバルな活動を通して社会に貢献し、自己実現していこうとする自発的意欲を育てることであり、それが育つような機会を提供する必要がある、ということをお話したい。

なお、本稿は、日本の人材育成における英語教育のあり方や意義を問うものではない。わずか4人の語りを扱う小論において、そのような議論を展開するのは、無理がある。本論はあくまでも、グローバル化に対応した人材の育成において、英語(外国語)を学び、日本語(母語)を教えるということ、学びの両輪として並行させることによって開ける可能性を検討するものである。そして、グローバルな場での活動を、人生の意義を深めるものとして若者に提示するためには、身に

つけた言語の力によって、国際社会において他者に必要とされる経験や、厳しい現実と直面し葛藤する経験を持たせることが望ましいということ、関係者と共有することが狙いである。

2. 背景

2.1. 英語教育改革の動き

今日の日本の教育において、英語がいかに重視されるようになってきているか。関係者にとってこれは既知の情報であるため、概要のみを記す。

英語教育は、戦後一貫して重視され続けてきたが、日本の国際産業力の低下が明白になった前世紀末から、「国際化」、「英語教育の強化」を叫ぶ声は著しく大きくなった。文部科学省は2002年7月に『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想：英語力・国語力増進プラン¹を発表、「国際社会に活躍する人材等に求められる英語力」について、「各大学が、仕事で英語が使える人材を育成する観点から、達成目標を設定」することが求められるとした。翌2003年3月に発表された『英語が使える日本人』の育成のための行動計画²では、「日本人に求められる英語力」の目標が整理され、「専門分野に必要な英語力や国際社会に活躍する人材等に求められる英語力」について、「大学を卒業したら仕事で英語が使える」との文言が加えられた。ただ、ここで言う「仕事」とはどのようなものなのかは明確にされておらず、「各大学が達成目標を設定」という一文を再掲するにとどまっている。

2011年6月には、「国際共通語としての英語力向上のための五つの提言と具体的施策」³、2014年9月には「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」⁴、といった一連の方針・施策が発表され、英語強化の動きは加速し、小学校英語教育の必修化も決定した。「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」には、以下のような記述がある。

¹ http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm

² http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryu/04042301/011.htm

³ http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/082/houkoku/1308375.htm

⁴ http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm

社会の急速なグローバル化の進展の中で、英語力の一層の充実が我が国にとって極めて重要な問題。これからは、国民一人一人にとって、異文化理解や異文化コミュニケーションはますます重要になる。その際に、国際共通語である英語力の向上は日本の将来にとって不可欠であり、アジアの中でトップクラスの英語力を目指すべきである。(中略)東京オリンピック・パラリンピックを迎える2020(平成32)年はもとより、現在、学校で学ぶ児童生徒が卒業後に社会で活躍するであろう2050(平成62)年頃には、我が国は、多文化・多言語・多民族の人たちが、協調と競争する国際的な環境の中にあることが予想され、そうした中で、国民一人一人が、様々な社会的・職業的な場面において、外国語を用いたコミュニケーションを行う機会が格段に増えることが想定される。

この記述については、グローバル化が進展によって国民一人一人が、英語によるコミュニケーションを行うようになるのか、そうだとした場合アジアトップクラスの英語力を目指す必要があるのか、多文化・多言語・多民族の人たちが日本で生活するようになった時に、日本人が彼らと「協調と競争する」上で必要な外国語は英語なのか等、より議論を深めるべき点があるように思われる。

なお、同文書には、この主旨を達成するために、国が示す教育目標・内容の改革の第一案として、

学習指導要領では、小・中・高等学校を通して1.各学校段階の学びを円滑に接続させる、2.「英語を使って何が出来るようになるか」という観点から一貫した教育目標(4技能に係る具体的な指標の形式の目標を含む)を示す。

という文言が記されている。ここでいう「何が出来るようになるか」とは、あくまでも言語の4技能にかかわるものをさす。好きな職に就ける、多くの友人に恵まれる等、児童生徒に「英語を勉強して、出来るようになることは何か」と尋ねたら答えるであろう、個人の人生の豊かさにかかわる目標ではない。同文書では、「学習の動機付け」という言葉も計8回使用されているが、その具体例としては、英語の使用機会を増やす、資格・検定試験を活用するといったことが書かれているのみで、英語が出来るようになることと個人の幸福の間の関係についてはやはり言及されていない。森住(2012:144)は、これらの施策について「理念の欠落、つまり、『何のためにどのような英語力をつけるべきなのか』が欠落している」としている。

英語教育の強化拡充が求められているのは初中等教育機関のみではない。英語能力の強化は、むしろ、職業能力の育成が期待される、高等教育機関に、「グローバル人材育成」と抱き合わせる形で、より強く求められている。

2005年に発表された「文部科学省における国際戦略(提言)」⁵には、第1節として「国家の根幹たる人材戦略」が掲げられ、項目の1に「国際社会で活躍する人材を義務教育レベルから育成」、2に「『知』の拠点たる大学及び研究機関の国際競争力の強化」があげられている。リーマンショックを経た2010年には、「新成長戦略『元気な日本』復活のシナリオ」⁶が閣議決定された。「『強い経済』『強い財政』『強い社会保障』の実現」に向けたプランをまとめたこの文書の中に、「グローバル人材の育成」という項目があり、「我が国の教育機関・企業を、国内のグローバル化に対応する人材を生み出す場とする」という一文が記されている。これ以降、「グローバル人材」という言葉は時代のキーワードとなっていく。

2011年5月には、内閣官房長官を議長とし、経済産業省大臣、文部科学大臣らを構成員とする「グローバル人材育成推進会議」が設置され、2014年には文部科学省が「スーパーグローバル大学の創成支援」、「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」を含む、「スーパーグローバル大学等事業」⁷事業を開始した。この「スーパーグローバル大学」に求められる成果の指標として、「外国語による授業科目の割合」があるが、この「外国語」とは実質的に英語であることから、「大学の授業を英語で行う」ことの是非が、巷間の議論の的となっていく。

英語教育改革の動きは入試制度にも影響を及ぼした。2013年に自民党教育再生実行本部が大学入試へのTOEFL導入を提言⁸、2014年には文部科学省が「高大接続」と「大学入試改革」に先行して4技能英語外部試験を活用することを大学に求め⁹、大学での英語教育において、「資格取得」や「数値化」が重視されるようになっていく。

⁵ http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/senryaku/teigen/05092901.htm

⁶ <http://www.kantei.go.jp/jp/kakugikettei/2010/sinseichou01.pdf>

⁷ http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1319596.htm

⁸ <http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/dai6/siryuu5.pdf>

⁹ http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/08/20/1351000_01.pdf

2.2. 英語教育改革の動きに対する批判

五十嵐(2015)は、グローバル人材育成とは英語の流暢な人材の育成に還元できることが多いとし、『世界で勝つ』人材育成といったような教育の文脈で使われているが、そこに不可避免的に伴われる競争への動員というニュアンスや、過度に手垢のついた『グローバル』という語感から、どうしてもある種の胡散くさきがつきまとう(同:15)と記している。

確かに、グローバル人材育成や、英語強化の政策は、「競争」、「トップクラス」、「経済社会の牽引」といった文言が各所にちりばめられていることから明らかなように、経済界の一部からの要請を反映したものであり、教育界からは、大津(2009)をはじめ、これに反発する声も大きい。

ここでそのすべてを網羅することは控えるが、英語強化反対派の論拠の一つとして、「英語より日本語(日本人のマジョリティにとっての母語)」という主張があることには触れておきたい。この議論は、いわゆる学術論文とされるものよりも、人口に膾炙する書籍や新聞等で行われているものが目立つ。おそらく最も有名なものは、幼少期を米国で過ごした作家・日本文学者の水村美苗の著書で、2009年の小林秀雄賞を受賞した『日本語が亡びるときー英語の世紀の中で』(2008)だろう。ここで水村は、「日本人は何よりもまず日本語ができるようになるべきであるという前提をはっきりと打ち立てる」、「<国語>としての日本語を護ることを私たち日本人のもっとも大いなる教育理念として掲げる」(水村 2008:290、傍点原文のまま)等と記している。より挑戦的な議論としては、鈴木孝夫や津田幸男等、英語研究に従事してきた言語学者の一連の著作があげられよう。例えば津田(2011:104)は「日本の隅々まで英語がはびこり、英語が『上位言語』、日本語が『下位言語』になっている現実」を糾弾し、「英語をはじめとした諸外国の影響をはねのけるのが日本語です」(同:4)と激しい論調で述べている。その他関連分野では、政治学者の施光恒が、2015年に『英語化は愚民化ー日本の国力が地に落ちる』(集英社新書)を著し、当代の論客の「絶賛」を浴びた¹⁰とされる。施と、同じく政治学者の白井聡は、季刊誌『KOTOBA』2015年秋号¹¹での対談「負け続ける日本を作る『英語化』政策の大罪」(pp. 166-171)において、「英語化推進は大学にとって自殺行為以外の何ものでもない」(白井)、「日本語ではなく、英語で授業が行われるようになる。これでは、日本独自の学問研究など発展するわけがありません」

¹⁰ 集英社のウェブサイト(<http://shinsho.shueisha.co.jp/se/>)には、佐伯啓思、水野和夫等の推薦文が記載されている。

¹¹ 『KOTOBA』第21号(2015秋号) 集英社

(施)といったやりとりを行い、英語化政策を対米追従という視点からとらえ、批判している。

一部の有識者から日本語軽視と激しく攻撃される英語強化政策であるが、前述のグローバル人材育成会議が2012年に発表した「グローバル人材育成推進会議審議まとめ」¹²には、グローバル人材育成の課題として、1に「英語教育の強化、高校留学の促進等の初等中等教育の諸課題」、2に「大学教育の諸課題」、3に「採用活動の改善等の経済社会の諸課題」、そして4の「その他の課題」の中に、「職業教育・職業訓練等の充実」、「国際的なボランティア活動の促進」、「日本語・日本文化の世界的な普及・展開」という文言も並んでおり、日本の国際化やグローバル人材育成が、英語強化一辺倒で片付けられているわけではないことは見てとれる。また、この審議まとめの本文には、若者が留学を避け、「内向き化」していることについて、

保護者が、進学率のまだそれほど高くなかった20～30年前の自らの経験に基づくイメージで、経済・雇用情勢が全く異なる現在の若い世代を「良い」学校→「良い」大学→「一流」企業→幸せな人生、という単線型の人生設計に駆り立てる傾向も根強くあったのではないか。(p5)

という一文もあり、教育する側が固定観念によって若者を追い込む弊害についても、目配りはされていることもわかる。とはいえ、「単線型の人生設計」の対極が、「留学する人生」とは言えないということにも思い至るべきであろう。留学の推奨は、雇用状況に不安が増す中、保護者や教育機関が、漠然とした国際化への期待から、「良い」大学→「英語力向上のための」留学→幸せな人生、という新たな単線型の人生設計に、若者たちを追い込もうとする動きだとも考えられるからである。

2.3. 国際ボランティアと日本語普及促進

ここで、「グローバル人材育成推進会議審議まとめ」の4「その他関連する重要課題」に記された、「国際的なボランティア活動の促進」、「日本語・日本文化の世界的な普及・展開」について補足しておきたい。同文書には、この二項目について以下のように記されている。

(2) 国際的なボランティア活動の促進

☆青年海外協力隊を中核とする、JICAによるボ

¹² http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011_matome.pdf

ランティア派遣を推進する。【外】

☆青年海外協力隊を中核とする、JICA によるボランティアへの参加を促進する観点から、その経験を帰国後における社会の様々な分野での（特に女性の）活躍に有効につなげるための方策を、NGO・経済界等各方面の参画を得て推進する。【外、文、経】

(3) 日本語・日本文化の世界的な普及・展開

☆日本語・日本文化の世界的な普及・展開を図るため、国内外の広報・文化交流等を有機的に結びつけるための取組を行う。【外】

☆日本文化理解の入り口となる日本語の普及のため、海外での日本語講座、日本語能力試験、日本語教師派遣等、海外での日本語教育を充実・強化する。【外】

☆開発途上国の初等中等教育機関や観光系専門学校等での日本語指導を支援するボランティアを派遣する。また、特に中南米での日系社会の次世代人材を育成・確保する観点から、日系子弟の継承語・継承文化としての日本語・日本文化の日本語学校での学習を支援するボランティアを派遣する。【外】(pp. 24-25、以下省略)

カッコ内、外、文、経の文字は、それぞれ外務省、文部科学省、経済産業省を指す。英語教育や大学教育の諸課題については【文】の文字が並んでいたのに対し、上の項目は、多くが外務省管轄の業務であることがわかる。「青年海外協力隊を中核とする国際ボランティアの派遣」や「日本語・日本文化の世界的な普及・展開のための日本語教師の派遣」については、外務省のみが担当で、この課題に取り組むために、日本の教育機関が何をするのかは書かれていない。文部科学省、経済産業省が主に管轄する、1の「英語教育の強化、高校留学の促進等の初等中等教育の諸課題」、2の「大学教育の諸課題」、3の「採用活動の改善等の経済社会の諸課題」とは異質な、まさしく「その他」の扱いとなっている。「グローバル人材育成」構想が、日本国内の教育課題であることを考えれば、外務省所轄事業が、その中に含まれていることのほうが、不自然というべきなのかもしれない。だが、周辺の位置づけではあっても、これらの項目が国の教育課題に含まれていることの背景には、JICA ボランティア志望者の激減問題への配慮があるのかもしれない。

上記(2)において、JICA ボランティアの中核とされた青年海外協力隊(Japan Overseas Cooperation Volunteers, 通称 JOCV)は、アメリカの平和部隊を参考に1965年に創設された国際ボランティアで、半世紀にわたり日本のODAの一環として運営されてきた。こ

のプログラムは、「現地の開発への協力、日本の青年育成、現地と日本との友好親善促進」を目的に、日本の20歳から39歳までの青年を、「青年海外協力隊員」として、発展途上国に2年から3年間派遣する。選抜された協力隊員は、担当する技術分野と、現地語、国際協力等についての派遣前研修を受け、国費の支援を受けて送り出される。これまで世界88カ国に、累計42,105人¹³の青年たちを送り出してきたこの国家的事業への応募者は、近年減少を続け、2015年度には、12年前のピークと比して73%減となった。青年海外協力隊員には、日本語教育に従事する日本語教師隊員¹⁴もいるが、日本語教師隊員への応募者の減少ぶりは、殊に顕著であり、2015年度には12年前と比して実に93%減少している(平畑2017:76)。

JICAは、協力隊応募者数減少の理由として、「帰国後の就職難」や「若者の内向き志向」等を挙げている。また、JICA ボランティアの活動の場である発展途上国について否定的なイメージを持つ人が多いことや、JICA ボランティアに参加したくても、外国語ができないことを障害として感じる人が多いという報告もある(清水2011:20)。いずれにせよ青年海外協力隊の応募者減少は、日本にとって好ましいものではない。公的に派遣された日本の青年が、発展途上国で技術協力を行うことは、草の根外交推進の観点から見て効果的だからである。海外での日本語教育推進もまた、親日家を増やし、日本の存在感を示すために重要である。これらを「グローバル人材育成」政策の課題の一つに位置づけ、国内に印象づけられることができれば、志望者減少に歯止めがかかるという関係者の期待も、あるいはあったのではないか。だが、国際ボランティアの促進も、日本語・日本文化の世界的な普及推進も、日本国内の教育課題と有機的に結びつけられてはいない。佐久間(2014)は、日本のグローバル人材育成には「オールジャパンで」という姿勢が欠けており、日本の省庁間のセクショナリズムが強いことが、青年海外協力隊を日本のグローバル人材として位置づける上での弊害になっていると指摘している。

3. 疑問点

以上、グローバル育成人材政策、英語教育改革政策を見てきたが、やはり、その実体や意義が見えにくいということが、まず問題だと思われる。五十嵐(2015)の指摘通り、「グローバル人材」という言葉には「胡散

¹³ <https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/results/jocv.html>

¹⁴ JICAの公表によると、日本語教師隊員の累積派遣者数は2016年12月31日現在1,909人で、全青年海外協力隊員の約5%に相当する。なお、日本語教師隊員の約80%が女性である。

臭さ」があるとしても、日本の未来を担う若者たちの目を国際社会に向けさせること、異文化環境で異文化を持つ人々と働く、グローバルキャリアへの展望を与えることは、教育上必要であるはずだ。しかし、本稿で扱った材料のみを見ても、以下のような疑問が残る。

- (1) 英語力向上だけでよいのか: 英語の国際共通語としての有用性は明らかであり、「日本語を護るため」といった理由で、これを教育の中から排除しようというのは極論であろう。とはいえ最近の日本をめぐる状況について言えば、国際化すなわちアジア化になっている(平畑 2014:174-176)。日本との関係がますます緊密になっていくアジア諸地域の人々との交流を進める上では、英語はそれほど有力なツールではない。(独)国際交流基金の2015年度の調査¹⁵によると、海外には、少なくとも3,651,715人の日本語学習者がおり、その79%がアジアに存在する。日本の若者には、アジアの言語、あるいは平易な日本語を駆使して、外国人とコミュニケーションするための訓練も必要ではないか。特に後者に関しては、日本語教育の知見が役立つのではないか。
- (2) どのようなキャリアを目指させるのか: 若者の英語力向上やグローバル人材育成を、国の課題とまで位置づけるのであれば、児童生徒や若者たちに「英語を使って何ができるようになるべきなのか」、「グローバル人材というのはどのような人なのか」について、教育する側が期待する目標を提示する必要があるだろう。4技能のステートメントやTOEICの点数、就業可能職種を示すだけでは不十分である。小関・田中(2015:102)は、若者をグローバルキャリアへ誘導するためには、ロールモデル確立が課題であると述べている。まだ将来というものがそれほど具体的には考えられない若者たちに、英語を学び、海外に出ることで、各個人の人生にどのような展開がもたらされるのかを示すモデルが必要なのではないか。
- (3) どのように動機づけるのか: 加藤(2016)は、「グローバル人材言説」を、国家主義・企業中心主義・階層主義というキーワードから読み込んでいる。つまり、今日のグローバル人材育成政策が育てようとしているのは、「日本企業の海外駐在員となれるエリート(基本的に男性)」(同:182)であると見ている。逼迫した国庫を抱える政策の立案側が、経済効果を考慮して人材育成計画を立てること自体は責められるべきものではない。しかし、教育機関が「グローバル人材」というものを、そのような限定された性質のものとして提示してしまっただけでは、海外という場の含む豊かな可能性の一部しか、若者たちに示せ

¹⁵ <https://www.jpff.go.jp/j/about/press/2016/dl/2016-057-2.pdf>

なくなってしまう懸念もある。

2016年度の(独)日本学生支援機構の調査では、海外留学日本人学生の過半数が女子学生である¹⁶。平畑(2017)は、その8割が女性である青年海外協力隊日本語教師隊員116名へのアンケート調査から、彼/彼女らは経済的な成功への執着が非常に薄く、社会的承認や自己実現への希望が強いことを確認している。より幅広い層の若者たちをグローバルキャリアに誘導するためには、海外で働くということの中に見出しうる個人の幸福感や生きがいといった、若者の感情に訴える価値を、提示する必要もあるのではないか。

4. 事例報告

4.1. 調査の位置づけ

こうした問題を考える参考例として、以下、「英語が使える日本人」4人の、グローバルキャリア構築のライフヒストリーを紹介したい。

田中(2013:66-67)は、「グローバルキャリアは、『国境を越えた地理的な移動』を伴う点で、他のキャリア研究と特質が異なる」、「当事者のライフヒストリーとキャリアトランジションを相互に関連させながら内的に分析されることが望ましい」とし、当事者のライフヒストリーの聴き取りにおいて、グローバルに働くことの個人的な経験の内実、グローバルで働く人の志向性、また、グローバルに働くようになったきっかけに注目する必要があるとしている。

今回、そのライフヒストリーを紹介するインタビュー4人は、元青年海外協力隊日本語教師隊員である¹⁷。全員、協力隊に参加する前に、本格的な英語学習の経験があり、もともとは英語を使った仕事に就くことを計画していた。しかし、それぞれの事情によって、日本語教師となり、青年海外協力隊に参加、途上国での日本語教育に従事した。そこをグローバルキャリアの出発点とし、彼らはそれぞれのスタイルで「国際社会で活躍」するようになっていく。

4人のインタビューへの調査は、2013年から2015年に行った。調査者自身が対面で半構造化面接を行い、音声文字化し、分析した。分析方法としては、文字化した資料を切片化し、キャリア選択のきっかけ、志向、仕事に感じている意義等に注目して、ラベリングを行い、そこからキーコンセプトを抽出していった。

¹⁶ http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_s/2015/_icsFiles/afieldfile/2016/03/25/short_term14.pdf

¹⁷ 本調査は、青年海外協力隊日本語教師隊員を対象とする、より規模の大きい調査の一部である。他の調査事例は、平畑(2014, 2017)等にまとめられている。

4.2. インタビュー어의プロフィール

プロフィールの数字(年齢等)はインタビュー時点でのものである。個人が特定される恐れのある部分については、情報を曖昧にしている

・Aさん(女性、40代前半、協力隊任期終了後約10年)
外国語大学卒業。英語教員免許取得後、地元の高専で英語教師として数年間勤務した後、退職。日本語教育に興味を持ち、青年海外協力隊を受験して合格。日本語教育学については主に協力隊の研修で学ぶ。東南アジアのA国の中等教育機関に派遣され、帰国後、国内の大学院に進学し、日本語教育学の修士号を取得。様々な教育機関で日本語教師として働いた後、A国の日系日本語学校の専任教員として採用され、再渡航。

・Bさん(女性、30代前半、協力隊業務終了後1年)
日本の高校卒業後、アメリカの大学に進学。自然保護について学ぶ。帰国後、日本の観光施設に勤務するが、職場の人間関係等に悩み、再渡米の手段として日本語教師に注目、資格取得のために学ぶ。その後青年海外協力隊に応募して南アジアのB国の大学に派遣される。現地では児童養護施設や農村でのボランティアも自主的に行う。日本に帰国後、アメリカ人男性と結婚し、再渡米。現地の貿易会社で働きながら、南アジアの児童福祉のためのNPOを立ち上げる。

・Cさん(女性、20代後半、協力隊業務終了後2年)
大学で英語学を専攻。在学中アメリカへの長期留学を経験。英語話者の日本語学習への興味から日本語教育学も並行して学ぶ。英語学の大学院に合格するも、辞退して青年海外協力隊に参加。英語とフランス語が公用語とされている南太平洋のC国に派遣され、離島の中等教育機関で日本語教育に従事。帰国後、地球環境測定機器を扱う企業に正社員として採用された。

・Dさん(男性、40代前半、協力隊業務終了後約20年)
少年期から英語教師に憧れ、大学で英語教員免許を取得。在学中に日本語教育に関心を持ち、独学での勉強を開始。卒業後フリーターをしながら青年海外協力隊を受験、東欧D国の中等教育機関に派遣される。現地でロマの子どもの問題を知り衝撃を受け、開発教育に関心を持つ。協力隊任期終了後イギリスの大学院に進学、修士号取得後帰国。日本の政府機関を受験するが失敗、様々な仕事をしながら国連JPOに応募し合格、アフリカに派遣される。その後アフリカ各国でユニセフのP3、P4¹⁸のポストを歴任した後ユニセフ本部に移

¹⁸ 国連諸機関では、P1からP3の職位は「エントリーレベル」、P4-P5は「ミドルレベル」すなわち中間管理職と

動。イギリスの大学院の博士課程にも在籍し、現在博士論文執筆中。

4.3. 協力隊参加以前のライフストーリー

4.3.1. 本格的な英語学習のきっかけ

4人の語りにも共通しているのは、もともと、いわゆる上昇志向のようなものは持っておらず、どちらかという将来展望に関して無欲であったことである。とはいえ全員、いわゆる中堅以上の大学に進学しており、十分な教育を受けている。英語については中学高校から積極的に学んでいた。英語学習の動因は、海外への興味、英語が好きだったこと、英語教師への憧れ、あるいは日本からの逃避等である。本稿では以下、インタビューの語りの中でキーワードとなる語(ラベル)を下線で表示する。そしてそこから抽出されるキーコンセプトを、末部カッコ内に表示する。

もともと英語は好きで、得意だったんです。で、外大に。英語の教員免許は一応取って。将来の夢として、先生になるっていうのもありましたが、海外とつながりのある仕事を何かできれば、ぐらいいの気持ちでした。あまり何も考えていなかったと思います。卒業後高校教師になって、その頃は英語の先生をずっとやるつもりでした。(Aさん)

日本の高校を卒業して、そのままアメリカの大学へ行きました。日本の大学受験をしたくなかったんです。中学受験、高校受験で失敗して、もういいかなど。思いつき逃避ですよ。英語は、好きは好きでしたけれど。たまたま、高校1年の時にアメリカに行って。それでけっこう好きになってしまっ。(Bさん)

子どもの時から海外に興味があって、英語をやたらいろんな国の人と話せるって思ったんです。高校生の時留学して、初めて自分の英語をツールとして、自分の力で、違う国の人と話せたっていう衝撃が強かったんです。それで大学で英語を専門にして。卒業する時は、英語を使って何か仕事をしたい、いやその前に大学院にも行きたいって気持ちもあって。(Cさん)

中学校のころ、高校の英語教師をしたかったんです。ドラマの影響ですかね。学校の先生っていう

る。国連職員の昇進は極めて困難で、特にP3以上のポストは全世界の候補者との激しい競争となる。2015年時点で国連職員として勤務する日本人は全レベルあわせ81人とされる。

http://www.mofa.go.jp/mofaj/fp/unp_a/page22_001263.html

のに、すごく懂れて。で、英語が好きだったので、そのまま大学の文学部に。教職取って。卒業したら中学か高校で英語教えようと。でも海外とか別に行ったこともなかったし。海外で働きたいとか、まったくなかったですね。(Dさん)

【英語好き、海外志向、教育(教職)・コミュニケーションへの関心、曖昧なキャリアプラン】

4.3.2.「英語学習者」から「日本語教師」へ

全員、大学卒業の段階で「仕事で使えるレベル」と見なされる英語力¹⁹を身につけており、英語を使っている日本でのキャリア形成が可能な状態にあった。しかし偶発的なできごとや、心境の変化により、コース変更を迫られる。英語ができた彼らは、海外で働く道を希望し、日本人が海外で働くためのツールとして「日本語教育」を発見し、さらにそこに「青年海外協力隊」という選択肢が出現する。

英語教師の仕事は楽しかったんです。でも、あの頃、英語をがっつり教えたいという気持ちがあったと思いますが、そういうわけにもいなくて。英語を教えるっていうことは半分ぐらいで。あとの半分は生徒指導とか、そういうことで。しばらくして家の事情があって、英語教師を辞めざるをえなくなって。自分の環境を変えたいって気持ちがあって。外大出身ですから、海外に興味があった。何か海外でできることはないかなって思い始めて、本を見たら、ワーキングホリデーとかいろいろあって、その中に青年海外協力隊の宣伝があり、日本語教師っていうのがありました。それまで私の頭の中には、自分が外国語を勉強するっていうのはあったんですけど、自分の母語を、「日本語を教える」って発想はまったくなくて。「はっ」と思いました。その時から、英語はどこかに行ってしまう、日本語教師になるには勉強しないとイケないんだとわかって勉強を始めました。で、協力隊経験者の話を聞く会とかに行くと、隊員が、感動的な話をいっぱいなさるんです。途上国に行って協力するって、普通の人にはできないこと、特殊能力のある人がやるんだって、思ってたんです。でも実際に話を聞いたら、すごい人ばかりが行くんじゃない、自分でもできるんじゃないかって。(Aさん)

¹⁹ インタビュー어의個人毎の英語能力試験の点数を記載することは避けるが「英語が使える日本人のための育成計画」において、仕事で使える英語力、英語教員の望ましい英語力の基準とされた、TOEIC730点程度を十分上回るレベルには、全員到達していた。

大学での専攻は自然保護でした。でも、パークレンジャーとかに懂れても、アメリカ人じゃないとできないんです。で、アメリカで働くのは難しいし、なんとなく自分でも自信がなかったんで、日本に帰りました。それから、英語がちょっとできるといって・・・観光関係の施設で働きました。でも、勤め先によっては・・・人間関係が。私が自分のTOEICの点とか書いて出したら、「あら英語ができるのねえ」みたいなこと言われて・・・妬みじゃないでしょうけれど・・・それで辞めて。体調崩したりとかして。それで、何がしたいのかって振り返った時、アメリカの生活は楽しかった、アメリカにまた戻りたい、仕事もしたいって。それでなんとなくつながったのが、日本語教師だったんです。自分がアメリカでできるものは、ほかはない、これしかないと思って。それから養成講座に通いました。そうしたら意外にはまってしまって。楽しくて。すぐにアメリカには行きませんでした。そのうち青年海外協力隊の話を聞いて。(Bさん)

学部生の時にも、アメリカに1年留学をしたんですけど、今後は日本語も学んで、自分の言葉の幅を広げようって思って。日本語教育の専門学校に行ったんです。で、言葉の世界ってなんておもしろいんだろうって思っていました。そうしたら教授に呼ばれて、大学の留学生センターに日本語教師の空きがあるから経験積んでみてはどうかって言われました。学習者は英語圏の人ばかりで。あぁ、おもしろそう、やってみようかなって。楽しかったです。英語と日本語の違いとかも学べて、たいへんいい経験になりました。将来、英語の先生になるか、日本語の先生になるか、迷いました。英語の大学院を受けて、それから協力隊も受けて、両方受かって迷いましたが、英語学の教授が、英語を勉強して日本語も勉強するってことは、あまりできることではないんじゃないかと。必要としてくれている人がそこにいるのであれば、そこに行ってもいいんじゃないかと。(Cさん)

大学時代って、いろいろ迷うじゃないですか。英語に、どこか自信がなかったんです。大学3年の時、日本語教師って仕事について、たまたま友達教えてくれたんです。その時に、自分の母語である日本語を外国語として外国人に教えるほうがいいんじゃないかと。外国語として勉強してきた英語を、外国語として日本人の子どもに教えるって仕事よりも楽しそうだよ。世界中の、い

ろんな国で、いろんな生活をしてきた人に教えることができるかもしれないって。突然ばあっと道が開けたみたいに思って。言葉は変わっても、外国語を教えるってところが自分のやってきたことと同じで、しかも自分にとって未知のものってことで、すごくエキサイトしましたよ。それで慌てて日本語教師の勉強を始めました。就職活動もせずに。その頃、協力隊で日本語教師やってきたって人の講演を聞いたんです。協力隊って、日本語というものを外国人に教えるというのを越えて、開発途上国というコンテキストの中に、自分が行って、いろんな経験をして苦勞をして、なおかつ、教える仕事もさせてもらえるって、一石数鳥になるかなって。英語の教師になろうと思っていたということは、もともと頭の中に海外への興味はあったんだとは思いますが、ただ、当時行ったことがある外国といえばアメリカと、あと東南アジアに5日間ぐらいでした。(Dさん)

彼らは、それまでに獲得してきた能力・資本を生かせ、かつ、その当時の問題を回避できる道として、日本語教育にたどり着き、「道が開けたようだ」、「なんておもしろい」と前向きに受け止めている。そしてその道を歩みはじめたころ、海外での日本語教育の実践と学びが両方可可能な場としての青年海外協力隊に関心を持つようになった。

【日本での生きづらさ、変化への期待、規定コースからの変更、グローバルキャリアへの足がかりとしての日本語教師、「自分にも何かできるかもしれない」という希望、言葉への理解を深めるおもしろさ】

4.4. 青年海外協力隊活動中の気づきと衝撃

青年海外協力隊員は赴任地や赴任機関を選ぶことができない。協力隊受験まで、彼らのライフヒストリーには比較的共通項もあったが、着任後はその赴任地の状況によって、経験に大きな違いが生じるため、協力隊活動中のライフヒストリーはインタビュー毎にひもといていきたい。

4.4.1. Aさん

Aさんの着任したA国は日系企業の進出が進み、日本語学習者は就職が非常に有利になるという状況があった。日本語教育の価値は明らかであり、教育機関も日本語教育に協力的だった。Aさんは、日本人が海外で日本語教師の仕事をすることのメリット、人に必要とされ、自己肯定感が持てる喜びを実感するようになる。

私は、国際協力とかを考えていたわけではありません。自分を変えたかっただけ。ただ、自分が何かをしたい、それで誰かが喜んでくれ、必要としてくれたら、そこに役に立てたらなっていう気持ちはあったでしょう。

でも、赴任地に送り出される時、研修の先生がおっしゃったんです。隊員みんなに向かって。「あなたの存在はすごく大きいものだから、それをぜひ海外で生かしてください」、「自信を持ってやってください」って。自分の存在が大きいんだってことを…すごく…自己肯定感みたいなもの、そういう気持ちをいただいたと思います。自分にも何かができるんだって気持ちを。私、自分に自信が持てないというか、いつも、これでいいのかなって思うタイプだったので。こんなふうに肯定される、こんなことってもうないだろうなっていうくらい。今はもう、自分の存在は大きいなんて思ってないですよ。ただ、あの頃は、そうやって励まされたことが嬉しかったんです。

赴任地で、私が、先生に言われたような大きい存在だったか…。実際、そう感じたこともありました。職種のせいもあると思います。日本語教師って、協力隊の中でも特殊な職種だと思います。ほかの職種って、別に日本人じゃなくてもいいってところがあって。で、現地で、やることないですよって言われたりする人もいるんですよ。でも、日本語教師隊員の場合、日本人が日本語を教えるってことで、それだけで一つプライオリティを持っていますし。私はたまたまですが、恵まれた環境で。だから、自分は何しに来たんだろうと思うことはまったくなかったです。

【自分を変えたかった、自信がなかった、日本人が日本語を教えるプライオリティへの注目、必要とされる喜び、自己肯定感・自己効力感を得た】

4.4.2. Bさん

青年海外協力隊は、開発途上国からの要請により、「必要とされる人材」として送られるものであるが、日本と相手国の政治的事情によって、必ずしもそうならないこともある。この問題は一般に「要請のミスマッチ」と呼ばれ、協力隊員を苦しめる問題の一つとして和喜多(2011)等、各所で取り上げられている。

英米との結びつきが強い南アジアB国の大学に派遣されたBさんも、当初は日本語教師としての自分の存在価値に疑問を感じていた。現地では日本語学習の必要性があるわけでもなく、またすでに現地大学には、

十分な数の現地人日本語教師がいた。しかし B さんは、対人サービスに長けた自分の特性と語学力を駆使し、現地と日本の二つの組織の調整者としての活動に、自分の居場所を見出すようになる。また、現地の児童養護施設での住み込みボランティア等、自分の任務以外の活動にも自主的に、献身的に取り組む。

送り出される時に、研修の先生に、「B 国では、日本語教師は要らないよ」って言われました。「えー」って思いました。来てみたら…確かに、この日本語教育は、協力隊員がいなくてもまわります。でも、協力隊員がいる意味はあると思いました。ここの大学の機関と、日本の機関の間の、互いの誤解を解くとか、そういうことができたらいいなって思っていました。

以前は、日本政府も、ここの日本語教育をどんどんサポートしますって雰囲気でしたが、最近変わってしまって。B 国は日本から見てアウェイです。B 国独自の文化もちゃんとあります。では、なぜ、ここの人が日本語を勉強してるのか、ここの大学で日本語を教えているのかって、考えた時…私だったら「ありがとう」っていう気持ちになると思うんですけど。日本の、政府の人には、そういう気持ちは、あんまりないような気がして…それが自分の中で…いやで。「日本語をやってください」って、気持ちが自分の中で強いんです。ほかの言語がある中で、日本語を好きになって、日本語を選んでくださって。もう 40 年以上も、日本語学習者を毎年生み出しているのに…そういうのをサポートしないなんて言うてしまうのは、なんだか失礼なような気がして。

ここの先生方は、日本研究したいとか、日本に行きたいとか思われた時、やっぱり経済的には、日本の組織や大使館に頼るしかないんです。でも、お願いしにくいところもあって。だから、私が、橋渡しになりたかったんです。けれどすごく難しく、うまくできなくて。

その児童養護施設では、もともとは短期の JICA ボランティアが活動していたんですが、帰国してしまって誰もいなくなったので、私が夏休みを使って、2 か月いたんです。なんで日本語教師隊員なのに、そういうこともしていたのかというところ…。私、けちなかもしれませんが、性格が。来たからには何でもしようって。行くのなら最大限って。やるんだったらすべて使い切る、って。(B さん)

【日本人日本語教師が必要とされない環境、日本語学

習者への感謝、現地機関と日本の組織の橋渡しになりたいという願い、調整役としての役割の認識、自分のすべてを使い切りたいという願い】

4.4.3. C さん

南太平洋の小さな島の中等教育機関に派遣された C さんの場合、さらに深刻な「必要とされない」苦痛を経験することになる。現地の生徒たちは過酷な環境の中で生きており、生活の役に立たない外国語を学ぶ余裕はないという雰囲気が漂っている。そもそも、その学校では、政府間のやりとりにより、生徒は日本語を学ぶように決められただけで、生徒には日本語学習への自発的希望はなかった、という状況に気がついた経緯がまず語られる。

今まで生きてきて、いろいろな苦難もあったと思うんですけど、自分にとっては、協力隊の 2 年が、いちばんの大きな苦難だったと思います。協力隊に日本語教師として合格した時の気持ちでは、「必要とされているから行くんだ」って気持ちが、ものすごく強かったと思いますし、実際、そういう印象もありました。でも蓋を開けると、現実はそのような甘いものではありませんでした。日本語教師がまったく必要とされていない中で、どうするのかっていうのが、本当に課題でした。着任した時には、もう日本語の人気もなく、生徒の興味も薄れていて。なんで日本語勉強するんだらうって雰囲気。仕事に使うあてはまったくないですし、そんなもの覚えなくても生きていける環境なのに。

だけど、自分が行く前に立てたあの目標、あそこまで行かなきゃだめだって。シラバスとか、授業を全部見直して。2 年目は、まっさらな状態で 1 から始めたんです。生徒たちは生活が不安定で。例えば両親が離婚したとか亡くなったとか、家庭で落ち着いて勉強できない子ども、お金がなくて勉強できない子どもとかも多くて、不安そうなんです。ですから、日本語のクラスは、そういうもやもやした気持ちを吹き飛ばすぐらい楽しい授業にしようって。そう私が思ってからは、みんなよくなりました。成績も上がりましたし。最後に、生徒たちが、サプライズのパーティとか開いてくれて、「なんで日本語を勉強するんだって最初は思ってたけど、自分で考えることの大切さとか、生きる知恵が身につきましたって」言ってくれて。この時間は、何にも替えられないすてきな時間でしたって言ってくれて。

一人の外国人としても、学ぶことがたいへん多か

ったです。島だったので衛生面とかインフラとか不十分でした。同僚の赤ちゃんが死んでしまったり、今日クラスにいた生徒が次の日にマラリアで亡くなって…とか。私、2年いる間に、生きるってことの重要さを、感じていたのかもしれない。日本にいる時も、そんなことも考えていたのかもしれませんが、学生の時って勉強に必死だったり、進路を考えるのに必死だったので、自分が働いてどういう役に立つか、どういう人たちとかかわりを持って進んでいくとか、あまり、考えられなかったと思うんです。だから少し大げさですけど、このクラスで出会って、お互いの顔を見て人生の1時間でも2時間でも共有して、分かり合う…分かり合っていないでもいいんですけど…それだけでもう私は、すばらしいことだって、ずっと思っていたんです。そこで日本語をやるからには、すごくすてきな時間にしようって。この人たち、私も、生きていることは当たり前じゃないんだって思いがありました。だから、力尽きてもいいから2年間精一杯やろうって、思ってたやっていた。

【日本語教育が必要とされないことの苦しさ、自己の存在意義の模索と確立、生の貴重さの実感、今ここで一緒に学ぶ価値の発見】

4.4.4. Dさん

国際社会においては、生命の危機、貧困、格差の問題に直面することが実際に少なからずあり、日本人の若者にとっては、人生観が変化するほどの衝撃ともなる。

Dさんは思いがけず東欧D国の、比較的恵まれた環境にある中等教育機関に派遣される。赴任機関では日本語は選択科目の一つであり、学習者の日本語学習意欲があまり高くないことには物足りなさもあり、時にアジア人に対する差別も受けながらも、「それも含めて楽しかった」と受け流すおおらかさをもって、初めての外国生活を謳歌していた。しかし、ある日日本語教育の枠外で、深刻な差別の問題に直面する。

彼らは日本語の教室には来てませんでしたが、学校の敷地内にいました。常にその子たちだけで固まっているんです。で、「あの子たち誰なの」って同僚に聞いたら、「ああ、あいつらジブシーだから」って。答えたのは学校の先生ですよ。当時僕が一番尊敬していた、本当に人間として優しい大人の男性だったんですよ。その人に…「あいつらは教育しようがない」と、「どうしようもない

から、ああやって校内で隔離するしかない」と、言われた時に…初めてわかったんです。それまでももちろん、町に行けばジブシーがいっぱいいて、スリやって、差別があつてって、知っていましたが、初めて自分の学校の問題として見てしまったというか、こんな近くで、こんな問題があったんだなど。あんなに…ふつうの国に、あんなに貧乏な人たちがいるんだなど。ちょっと、日本とかで言う「貧富の差」とは違うんですよ。…人間ではないというような扱いを受けていますから、彼らは。

協力隊として派遣されていたといっても、現地は別に貧しいわけではなくて、そこで「開発問題とは」とか、考えることはなかったんですけど。ただ僕の場合は、そこで本当に、直面したというか。なんだこれほど。生まれながらに、生まれただけで、そういう扱いを受けて…ってというのは、つらいなど。そういうのは日本にだってある話だったんでしょけれど。僕はその時に、初めて、ああ…こういう問題は、かなり厳しいなど。

自分は普通に高校で日本語教えているだけの人間だったんですけど、自分にもし、何かができるのであればしたいなど。そういうことにもかかわりたいと。

帰国したら大学院に行って日本語教師のさらに上を目指すか、初心に戻って英語教師になるかっていろいろ考えていたんですけど…こういう貧困問題とか、差別の問題とか、人種の問題とか、勉強して、もしできるなら、何かそういう仕事ないかなって思うようになりました。でも迷ったんですよ。「国際協力」とかいう本を読んだら、国連の仕事とかもあると。でも、本当にこれ自分のできるのかなと。すごくたいへんじゃないですか。語学ができて、専門性があって、学位があつてって。でも何とかできないかなと思って。何も考えずに、とりあえずやろうか、と。

【海外で生きる楽しさの発見、差別・貧困・格差問題への気づきと衝撃、国際協力業務への意欲の芽生え、何とかできないか、とりあえずやろうか】

4.5. グローバルキャリアの展開

4.5.1. 海外の学校に日本語教師として就職

Aさんは赴任中も日本語教育の勉強と研鑽を重ね、授業に喜びを感じ、自分の日本語教育の技術にも手応えと自信が持てるようになった。充実した派遣期間を終えたAさんは、日本に帰国、大学院に進学し、その後日本語教師としてのキャリアをさらに積んだ後、協

力隊の任国だった A 国に戻り、現地機関の専任教員として勤務する。

日本語教師をとにかく続けたかったです。どこでも構わなかったです。自分を必要としてくれるところがもしあるのなら、そこで働くチャンスを提供したらなって思っていました。

私、親が堅い仕事で、安定した仕事がいい、そういう価値観で育ってきました。でも、日本語教師って、安定はしてないけれど、私、先輩に言われたことがあるんです。「私たちって職人なんだ」って。その言葉にすごく救われたんですよ。スキルがあれば、世界のどこでも教えることができる。日本語を学びたいって言う人が、ありがたいことにいるから。この仕事は不安定で、この先どうなるんだろうみたいなことを思っていましたけど、その言葉を聞いた時、私の中で何か落ちたんです。楽観的かもしれませんが、好きな仕事をして、生きていけるんじゃないかと。この仕事が好きなので、どんな小さい機関でも、必要としてくれるところがあれば、どこでも行こうって。ただやりたいと思ったことをがんばってやっていきたいです。目の前にいる学習者に、できる限りのものは提供したいですし、学んでも行きたいですし。

【必要としてもらえることへの希望、好きなことをして生きていきたい、日本語教育の「スキル」への自信と学び続ける決意、不安定さと向き合う覚悟】

4.5.2. 結婚のため渡米、働きながら NPO 活動

協力隊任期終了後、B さんはアメリカ人男性と結婚、再渡米が決まったが、B 国との強いつながりを保ち続け、数ヶ月毎に自費で渡航し、かつての勤め先の大学や、児童養護施設で無報酬のボランティアをした。数年後、協力隊時代の仲間と現地支援の NPO を結成、アメリカの貿易会社で働きながら、B 国への支援活動も継続している。将来のキャリアプランというものは未だに曖昧だが、自分の根本にあるのは、「自然、人間」と「ボランティア、奉仕」への単純な関心であると言う。

B 国って、アメリカとは全然違います。もっとおもしろいです。アメリカって、日本に近い状態で。B 国は、何かもう少し、生々しいと言いますか、人の顔が見えると言いますか。日本もアメリカも、人の顔が見えないものばかりという気がします。それがすごく、つまらないような気がします。私はまた、なんとかして B 国に行きたいんです。

将来のキャリアの不安は、今でもありますよ。夫に養ってもらえるって思っていないから。その時は畑でも耕そうかと。私が大学卒業後に最初に働いたのは、オーガニックレストランなんです。もともと自然志向、というのがあって、オーガニックとか、そういう考え方をアメリカから持ってきて、染まっていたんです。B でもやりましたよ。農家に行ってボランティア。農業は本当に、ずっと興味があって。ずっと心にあって。ファームとか自分で野菜作るのとか、好きなので。本気です。農業と、時々日本語教育とか。もちろん、それだけで食べていくのは難しいと思いますが。私、みんなと同じでないといけないとか、思ったことはないですね。アメリカに行った時点で、もう足を踏み外しているような。アメリカに行くと、エリート街道なんかじゃないですよ。

【自然と人間、農業への強い関心、ボランティアの精神、みんなと同じじゃなくていい】

4.5.3. 日本の技術系企業への就職

南太平洋の島で 2 年間を過ごした C さんは、当初は、帰国後は大学院に進学して学びを深め、英語教師か日本語教師になるつもりだった。しかし、協力隊活動の中で、「日本は素晴らしいって気づいてしまった」ことから、日本社会に入って日本に貢献できる仕事をしなくなった。そして帰国後、JICA の進路相談室で紹介された、技術関係の職場で事務の派遣社員として働き始める。当初は仕事と並行して通信教育で英語の教職課程の勉強もしていたが、やがて、より責任のある仕事を任せられるようになりたいと思うようになり、派遣先の関連組織である、地球環境測定機器を運用する会社に渉外担当の正社員として採用された。

本当に未知の世界ですが、でも、どこかで私の日本語教師としての、途上国での経験を、この理系の世界でも活かせるって思っていました。日本ではない先進国と、途上国も経験したことは、自分にしかない経験で、強みだって思っていました。そんなことを主張して内定をいただきました。たとえば、衛星画像を災害対策に役立てる…。今後は途上国もそういう技術が必要になりますので、途上国の視点で考えられる人というか。日本にしかいたくないって人よりは、そういう人のほうがいい。英語も使うと思うんです。だから今までの経験が全部生かされて、採用をいただけたんだと思います。働くと決めたからには、もう全力でやろうと思います。正社員って責任もあります

よね。日本の社会の力になれればってどこかで思っていますし、世界の人たちの安全な暮らしが増えればいいと思います。

【自分の途上国での日本語教育経験・強みを生かせること、責任ある仕事への希望、日本の力になりたい】

4.5.4. イギリスの大学院を経て、ユニセフへ

任国で見たジブシーの境遇に強い衝撃を受けたDさんは、協力隊の任期終了後、D国の女性と結婚、妻を伴って帰国し、大学院進学費用を稼ぐため働きながら、開発教育研究で有名なイギリスの大学院を受験する。合格したが、資金は足りず、奨学金の審査にも合格せず、知人を回り借金して渡英。学業に専念し、1年で修士号を取得。帰国してJICAの専門員の採用試験を受験するも失敗。ネットカフェで就職活動にあけくれ、かろうじて開発コンサルティング企業に採用される。その後まもなく、「JICAに落ちるような人間が採用されるなんてありえない」国連のJP0に採用される。

JP0って、国連に日本人の職員を増やすための制度です。だから面接でも聞かれるんです。もしJP0に合格して、派遣されたら、継続して国連職員をしますかって。僕は「そんなのやってみないとわかりません」って。「行って気に入ったら、継続するように努力します」って言いました。真ん中の面接官が笑って、「あなたね、普通こういう時ははいがんばりますって言いますよ」って。でも、2,3年後のことは、わからないと思っていました。その真ん中の方が違う方なら、落ちていたかもしれません。

当時のJP0って、いいところの帰国子女、坊ちゃん嬢ちゃんがかっこう多かったんです。しゃべっているとすぐ英語に切り替わってしまうような人が何人もいました。協力隊員上がりもそんなにいません。実際に、あとでJP0に受かった人たちが集まった時、何人かに言われたんですよ、「この人は違う、自分たちのグループの人じゃないって思った」って。

Dさんは、自分のやりたいこと、感じることに徹底して忠実である。そして英語のできる日本人の中でも異質な者として認識されながら、驚くべき順調さで希少なグローバルキャリアを発展させていく。

教育を専門とするDさんが、JP0派遣先として希望できるのは、ユネスコかユニセフしかない。ユネスコは組織に柔軟性がなく、現場で活躍しにくいと感じたDさんは「第一希望ユニセフ、第二希望も第三希望も

ユニセフ」、「英語しかできないから、サブサハラアフリカの英語圏に行かせてくれ」と譲らず、結果そこに派遣された。現地でナイジェリア人の上司に、「私は君を川に投げ落とす。君は、溺れるか泳ぐしかどっかないよ」と言われ、奮起して仕事を始める。JP0終了後、同じアフリカでユニセフP3のポストに応募、100倍から200倍という倍率を突破し採用される。

今思えば、日本語教育は、海外に出てくるただのきっかけだったって、ことになりすけれど、でも日本語教育やったことは、今の国連の仕事にすごく生きていると思います。自分が教壇に立ったことがあるって、その経験があることは自分の中では非常に大きいです。僕らの仕事、途上国の教育行政とか、財政のサポートとか、していてもですね、教壇に立ったことがない人間がほとんどです。官僚だったりエコノミストだったり。テクニカルな部分では、そういうのは必要なんですけど、最終的なそのサービスの受益者って学生であり、その学生に毎日接する教師なんです。途上国のきつい現場で、教科書がない教室がない、教員の給料もまともに支払われないって、そういう現場で、教師がやらないといけないことは多大なんです。自分が教壇に立って教えたことがないっていう人たちが、プランを作っている中で、原体験として、実際…自分に、日本語教師という職業経験があるっていうことは、非常に大きいと、いつも感じます。

その後も様々な経験を経、難関を突破して、ユニセフ本部のP4ポストに就任した。国連の仕事には契約期間の定めがあり、再契約にあたっては多くの条件があるため、将来のキャリアプランは未だにわからない。

このままユニセフであと25年っていうのは、ないと思います。どうやって生きていくのかはわかりません。何がやりたいか、ですよ。今は大きい家に住んでいますけれど、昔は、家賃3万円の部屋に二人で住んで借金までありましたから、落ちる怖さはないです。

日本に帰国して、学校の教育現場に立ちたいっていうことは思います。英語の教師になるか、学校の民間校長。実は真剣に考えているんです。

【気に入った仕事、日本語教師経験と途上国教育行政とのつながりの実感、日本の教育界への復帰希望】

4.5. グローバルキャリア構築による意識変容

同じ「青年海外協力隊日本語教師隊員」という仕事を出発点に、「海外で働く」というキャリアをスタートさせた4人は、その後それぞれに大きく異なる「グローバルキャリア」を展開していった。しかし、英語学習から日本語教師への転向の語りの中に、比較的共通したものがあつたのと同じように、この経験を振り返って今何を思うのか、日本にいた頃とは意識はどのように変わったのを尋ねた時の、彼らの語りには共通するものがある。彼らは環境の変化や生活の苦しさを恐れない。やりたいと自分が感じることをする。そして、日本に対する愛情、責任感、恩返しをしたいという気持ちを表明する。

協力隊の時は、国の税金で来てるって意識、影響はありました。だからちゃんとしないといけないって、何か残さないといけないってというのは、すごく思っていました。ただ楽しいで終わったらだめだって。目の前にいる日本語学習者に自分は何ができるのかって。それでお金をもらってるんだって。教師って自己満足してしまうところがあるかもしれないですけど、そうじゃなくて自分を磨かないって意識は、できたと思います。今協力隊志望者が減ってるのって、不景気でみんな安定を求めているからでしょうか。だからこそ隊員には、協力隊の「次」を考えさせないと。日本語教師としての専門性を高められる仕組みになつてないと。協力隊は思い出作りになつてしまう。それは違うでしょう。それなら自分でお金出して旅行にいけばいいでしょって。それって税金の使い道としてもおかしいと思います。日本のためにも、そういう風にならないといけないと思います。(Aさん)

日本のためにつて、そういうところは、多分あります。他の人よりあつたと思います。みなさんの税金から、ふだんの食事とか、賄われているという気持ちがあるので。そのぶん、できるだけ、最大限で、ここでできることをやろうって。播いた種の数が多ければ、出る芽の数も多いだろうって。そのうち、それが日本に返ってくることもあるかなって。B国で、日本に対していい印象を持ってもらえて。…何か困つた時に、日本を助けてくれる、とか。いや日本は悪くないよってしてくれるような人を、増やすつてこととか。何か、ちょっとしたことでも…自分は日本のことちょっと知ってるよ、なんて思う現地の人が増えてくれればそれでつて。自分なりにがんばつてみました。

アメリカに行く時、祖母から、「日本を見捨てるのか」つて言われたのをよく覚えています。お国のために何かしなさい、みたいな。祖母はもういませんから、祖母に、証明はできませんけれど。(Bさん)

日本に対する考え方は完全に変わりました。私は10代の時からアメリカに行つて、何度も行き来したりして、完全に気持ちが日本を離れていたと思います。極端な話ですけど、私、なんでアメリカ人に生まれてこなかったんだろうって、ずっと思っていたんです。アメリカがすごく楽で。楽しくて。アメリカのほうが過ごしやすいんじゃないって、ずっと思っていましたけど、実はそうじゃない。日本人としてアメリカに行つて、アメリカから日本を見て、それから日本人としてC国に行つてC国から日本を見て、ようやく、日本つてすごいなつて思えました。日本の繊細さとか、美しいところ、歴史とか、改めてすごいなつて。それが私の中で、2年間の収穫でもありました。日本が好きになつたつていうことが。アメリカに行つても、そんな風にはまつたくなりませんでした。今まで私は、自分は英語が話せるから、世界中に友達を増やしてこられたんだと思っていましたが、そうじゃなくて…私が日本人だから、いろんな人が友達になつてくれたんだつて。「日本は人気がある国だから」つていう意味じゃなくて。やっぱり謙虚な気持ちがあるとか。「私が私が」、つて、アメリカ人とかよく主張しますけど、そういう面を持たない日本人としての私を受け入れてくれたし、そういう私だったから、いろんな人が興味を持って友達になつてくれたり、話をしてくれたのかな。

帰国後私も迷っていました。いろんな可能性を探っていました。で、日本のために働くつて。日本のために…いや、違う。日本人のためじゃなくて、日本の国のためじゃなくて、日本から発信して、世界を住みやすくしたい、みんなのためにつて。そんな意味です。一握りの日本人のためにじゃないです。だから今のこの会社はいいなつて。日本の技術で地球のこと、世界の人を助けているつて、日本にしかできないことで。私もそういうことがやりたいです。(Cさん)

日本に役立つこととつていうか、ちょっとお返しできることを、シェアさせてもらえるなら死ぬまでに一度はしたい、ぜひ。…税金使つたんです。協力隊とJPOで。このお返しをまだしてない。おこ

がましい言い方をすると、日本にフィードバックしたい。自分が、他の人より少し知っていることを、こういう業界のこととか、他の世界のことを。日本の政治家とか、その政治家を選んだ国民が今、「グローバル人材を育成しなければ」って言うのであれば、そう思われているかもしれない人間が行って、「グローバル人材の一人は、こんな感じです」って、具体例を知っていただければ。グローバル人材なんて言っても、何か…イメージがわからないと思うし、またそのイメージがとてつもなく美しいと思うんですよ。でも蓋を開ければ、奨学金全減してネットカフェから CV 送っていたような人間です、そういう人間もいるんです、ってことを一つのケースとして伝えたいです。

「グローバル人材イコール海外で過ごした人間じゃない」ということも言いたい。どこに行っても人間同じじゃないですか。人間の営みとかって同じじゃないですか。グローバル時代だからとか、21世紀だからこうとかじゃ、ないと思うんです。グローバル人材って…他の国の他の人間の問題を、対岸の火事とかじゃなく、憧れとかじゃなく、真剣に考えられる人じゃないでしょうか。

自分は人より上とか下とかじゃなくて、同じ人間だ、同じ問題だって思えるのが、本当はそうなんじゃないですか。だから、日本から一歩も出たことがなくても…どの国の人にも、わけへだてなく接している人っていますけれど、ああいう人が本当のグローバル人材です。

それから、自分の国の文化や言語を普及するっていう活動は、絶対になくしてはだめです。日本語教師を派遣して、日本の言語や文化を紹介させてもらって、その教師たちもその国の文化とかを学んで。

もちろん、英語が世界に広がっていく流れはある。それは単に便利だから。でも、経済的な利便性以上のものを求める人がいるでしょう。そういう意味で日本語って、日本って、魅力的です。

今、僕は国連とはいえ、アングロサクソン文化、欧米文化にどっぷりつかっていますが、日本的な意識や発想や考え方って非常に大事だと思います。僕が 10 年ぐらい先までユニセフにいたら、ちょっと対抗したいですね。今のあのアングロサクソン偏重のユニセフの組織文化に。日本語教育もそれと同じでしょう。今のまま行くと明らかにバランスが悪いですよ、世界に英語教育だけがあるって。それはアングロサクソンの価値観とかを反映していて。あれをグローバル化という名の

に、全世界に広めるってちょっと無理があります。ぎすぎすしますから。日本から発信してほしいと思います。(D さん)

【税金を使ってもらったことへの感謝、日本に貢献したい、日本に恩返ししたい、アングロサクソン文化に対する日本文化の魅力の認識、日本と諸外国との結びつきを深めたい、日本の教育・人材育成・日本語普及・文化発信の改善への願い】

5. まとめ

この 4 人のインタビューは、青年海外協力隊日本語教師隊員経験者 1,909 人の、あるいはさらに多数いるであろう「英語ができる日本人」の代表ではない。ただ出自も年齢層も異なる彼らが、「英語学習→途上国での国際ボランティア日本語教師」という一つの共通経験を経て、グローバルキャリアを開いていく過程には、ある種の共通性があり、示唆に富む。

- (1) 思春期、青年期のキャリアプランは漠然としており、熱心な英語学習の理由は主として「ただ好きだったので」というものだった。当然、グローバル人材あるいはそれに類する社会的成功者へのステップアップを意識していたわけではない。
→仕事で英語が使える人材を育てるには、外部からの強制的な圧力を高め、数値目標を明確化することよりも、個人の内発的な動機を尊重するほうが結果的に有効ではないか。
- (2) 英語を使った仕事をしようと考えていた/していた時に、キャリアコースの転換に迫られた。そこで、「海外に行きたい」「自分のしてきたことを生かしたい」という思いから、日本語教師という職業に注目した。
→日本語教育は日本人英語学習者にとって転向しやすく、また海外でのキャリア形成に確実に導いてくれるツールとなり得る。
- (3) 青年海外協力隊員として途上国で活動する中で、非常に幸福な、あるいは苦しい出来事に直面し、感情的に強く揺さぶられた。そこで生じた感情に従って、その後のキャリアを形成している。
→異文化環境で、他者への共感、必要性や生きがい等を強く感じることは、グローバルキャリア構築の一つの有力な動因となる。
- (4) 青年海外協力隊日本語教師隊員を経験したことによって、日本への愛情や責任感、貢献への意欲を感じるようになった。
→4 人のインタビューの中で、日本に税金を

納め、日本の経済活動に参加しているという意味では、日本に貢献しているのはCさんのみである。しかし、このような気持ちをもって海外で働いている日本人がいることは、日本にとって長期的には大きなプラスであり、それこそがグローバル人材を育てる意義なのではないか。

- (5) 環境の変化やリスクを恐れていない。他人と同じであろうとしていない。一方で高い公共意識と社会貢献、勤労への意欲を持っている。
→もともとそうした資質を持った人間であるからこのような経験を積むことになったのか、このような経験が彼らを育てたのか、因果関係は明らかではないが、途上国での経験が、彼らを成長させ、より視野を広げた可能性は十分にある。

仕事で英語が使える日本人であり、グローバル人材と呼びうる人材でもあろう 4人の語りには、「競争に勝つ」、「経済を牽引する」といった文言が登場しない。彼らは日本社会への貢献の意欲が高いが、それは、税金を使って経験を積ませてくれた日本への恩を返すためであり、日本が諸外国との競争に勝利することを願っているわけでもない。好きなことをすること、自分を生かすこと、人に必要とされ、人の役に立つことへのこだわり、要求が、くり返しその語りの中に、あるいは行間の中に立ち現れる主旋律であり、英語学習も日本語教育活動も、その後のグローバルキャリアも、これを支える伴奏でしかない。その主旋律を揺るがせることがなかったからこそ、彼らはそれぞれの土地で、それぞれのグローバルキャリアを確実に作り上げることができたのではないか。

ここから、今日のグローバル人材育成や英語強化政策を改めて振り返りたい。国境を越えた人やモノ、情報の移動が活発化し、そこでの英語の支配力がかつてなく高まっている今日、教育政策の実施者が、日本の英語教育環境を整え、グローバルな場での活動を若者に奨励すること自体は妥当なことかもしれない。その流れを歓迎し、頂点を目指したいと願う若者もいるだろう。ただ、国際化時代対応のため、東京オリンピックのため、日本経済の力強い復興のため、といった題目の提示だけでは、潜在的なグローバル人材の資質を持つ若者たちを少なからず取りこぼしてしまうのではないか。グローバル社会とは地球全体のことである。一部の先進国の一部の間人だけが生きる社会ではない。インタビューたちが大切にしていた、自主性、責任感、報恩の精神、弱い立場にある人々への配慮、自然とのつながりといった要素は、教育というものの本質とかかわる重要な課題であり、これらと結びついた英

語教育政策、あるいは、グローバル人材育成政策こそが、今後考えられるべきなのではないのだろうか。

6. グローバル人材育成における日本語教師教育の可能性

2.2. で触れた「グローバル人材育成推進会議審議まとめ」においては、国際ボランティアの送り出しや、日本語教師の育成、海外派遣は、「その他の課題」という周辺的な位置づけだったが、若者に日本語教育の技術を教授する、日本語教師教育には、英語教育と共に学びの両輪として、広く若者たちに行う価値があるということ、最後に確認して本稿の結びとしたい。

日本人の普通の若者が、海外で働く経験を積みたい、と考えた時、選択肢はそれほど多くはない。まだ若い彼らの英語力や専門能力は不完全なもので、これを武器として海外で就職するのは容易ではない。企業の海外駐在員になるとしても、企業に採用されれば即海外勤務が約束されるわけではない。ワーキングホリデーや留学では、「働く」という経験にはならない。日本料理店等、日本人であれば採用されやすい業種もあろうが、一定の教育を受けた若者にとっては、やはりその教育を生かせる職が魅力的であろう。日本語教育、特に国際ボランティアとしての日本語教育は、そうした日本人の若者たちにとってアクセスしやすいグローバル社会への窓である。

日本語教師って、エントリーポイントとして、入りやすいっていうのがあったと思う。間口を広げるっていう意味では、大事ですよ。そのあとでプロになりたいければ大学院とかに行って勉強しなせばいいんですから。僕の場合は、国際開発教育に入るための、エントリーポイントがほかになかったですから。あの経験がなかったら、どうなっていたか、想像できません。(Cさん)

日本語は、国際社会で英語と比肩するような威信の高い言語ではないが、ワシントンポストによれば²⁰、「外国語としてその言語を学ぶ人の数」では、世界に5000とも言われる言語の中で第7位に位置づけられている。日本語学習者は世界133カ国にいとされる¹⁵。ある意味において日本語は、むしろ英語よりも、より

²⁰ ワシントンポスト 2015年4月23日より。なおこの記事において、1位は英語で学習者数は15億人、7位の日本語は学習者数300万人と記されている。

<http://www.washingtonpost.com/blogs/worldviews/wp/2015/04/23/the-worlds-languages-in-7-maps-and-charts/>

広い世界への扉を日本の若者たちに開く可能性を持っている。

ただし、本稿のインタビューを見ると、若年時に一定の教育資本(学歴、英語学習によって培われた言語や異文化への対し方等)を身につけていた人々だからこそ、英語学習から日本語教育へ、そしてより発展したグローバルキャリア構築へという転換のプロセスが順調に進んだのではないかと思われるふしがある。単に、日本語のネイティブスピーカーだから日本語が教えられるということではなく、外国人として外国語を真摯に学んだ経験のある人々には、すぐれた日本語教師となる素地があるのだと言えよう。

加えて、英語を学び、国際社会での就業を夢見て海外に出ていこうとする若者に対して行う日本語教師教育は、彼らの視点を複眼的なものにし、バランスのとれた国際人へと育てる上でも有効であろう。「グローバル人材育成推進会議 審議まとめ」には以下のように書かれている。

現状のままでは、中長期的な観点で経済成長の原動力となるべき有為な人材が枯渇して、我が国は本格的な再生のきっかけを失い、BRICs や VISTA といった新興国の台頭等、変化の激しいグローバル化時代の世界経済の中で、緩やかに後退していくのではないかと危機感を抱かざるを得ない。産業・経済の急速な高度化・グローバル化の中で、我が国がこのまま極東の小国へと転落してしまう道を回避するためには、あらためて海外に目を向けて「世界の中の日本」を明確に意識するとともに、自らのアイデンティティを見つめ直すことが不可欠なのではないか。(p.6)

世界の中の日本を明確に意識する上で、外国人に日本語を教える教師としての経験を積むことは非常に有意義であろう。そもそも、もしも日本の人材の枯渇を恐れるのであれば、英語教育は強化すべきではない。高い英語力を身につけた人材は、しばしば国外企業への就職を企図するからである。基本的な英語教育が即人材流出に繋がるものではないとしても、英語教育は学習者の目を英語圏に向けさせる。その英語圏の中心にある先進諸国を仰ぎ見るように育ってきた人々に、日本語教師教育は、異なる視点を与え、自身の足の下にある極東の小国への深い愛着を、その心に培うこともできるはずだ。

日本人にとって日本語は、英語を排除して護るようなものではない。旅を多くした人ほど故郷の美しさを知っているのと同様に、英語、あるいはその他の外国語を深く学んだ人々こそ、日本語を護り広める人間と

して大きな可能性を持っている。今後、グローバル人材育成政策と英語教育政策の中に、日本語教師育成政策が有機的に組み込まれることを期待したい。

7. 謝辞

ご協力くださいました皆様に深く感謝します。

なお、本研究は JSPS 科研費(JP15K04357)の助成を受けて行いました。

文 献

- [1] 五十嵐泰正, “グローバル化の最前線が問いかける射程,” グローバル人材をめぐる政策と現実, 駒井洋(監), 五十嵐泰正・明石淳一(編), 明石書店, 2015.
- [2] 大津由起雄, “危機に立つ日本の英語教育,” 慶應義塾大学出版会, 2009.
- [3] 加藤一郎, “語りとしてのキャリア メタファーを通じたキャリアの構成,” 白桃書房, 2004.
- [4] 加藤恵津子, “「自分探し移民」と「グローバル人材」,” グローバル人材とは誰かー若者の海外経験の意味を問う, 加藤恵津子・久木元真吾, pp.137-216, 青弓社, 2016.
- [5] 小關悠里・田中研之輔, “グローバルキャリア形成の道標(1)ー元在外公館派遣員のライフストーリーからー,” 生涯学習とキャリアデザイン, 167, pp.85-104, 2015.
- [6] 佐久間勝彦, “「グローバル人材」の育成はオールジャパンでー青年海外協力隊をめぐる杞憂と夢想,” グローバル人材再考ー言語と教育から日本の国際化を考える, 西山教行・平畑奈美(編), pp.100-137, くろしお出版, 2014.
- [7] 清水正, “青年海外協力隊がつくる日本 選考試験, 現地活動, 帰国後の進路,” 創成社, 2011.
- [8] 白井健道, “青年海外協力隊の発足と方向性,” 青年海外協力隊「現職教員特別参加制度」による派遣教員の社会貢献と組織的支援・活用の可能性報告書, 文部科学省平成 21 年度国際開発協力サポートセンター・プロジェクト, pp.9-17, 2010.
- [9] 田中研之輔, “グローバルキャリアへの社会的希求とその問題構成,” 生涯学習とキャリアデザイン, 11, pp.59-70, 2013.
- [10] 津田幸男, “日本語防衛論,” 小学館, 2011.
- [11] 平畑奈美, “国際ボランティア日本語教師の帰国後の社会包摂ー青年海外協力隊の応募者減少問題に着目してー,” 言語政策, 13, pp.73-100, 2017.
- [12] 平畑奈美, “「グローバル人材」と「地球的人材」との距離ー「国際ボランティア」日本語教師のキャリア意識をめぐる考察ー “, グローバル人材再考ー言語と教育から日本の国際化を考える, 西山教行・平畑奈美(編), pp.169-200, くろしお出版, 2014.
- [13] 水村美苗, “日本語が亡びるときー英語の世紀の中で,” 筑摩書房, 2008.
- [14] 森住史, “日本人にとって英語とは何かー英語教育と言語政策,” アジア太平洋研究, 37, pp.139-151, 2012.
- [15] 和喜多裕一, “青年海外協力隊事業の再構築に向けてー開発支援と人材養成との両立を目指して,” 立法と調査, 参議院事務局, 318, pp.86-97, 2011.

文中 URL はすべて 2017 年 2 月 6 日アクセス